

2010年 **GNOBLE** 4期生 東大文系 合格者ロングインタビュー

石丸	あんな (いしまる あんな)	桜蔭→東大文Ⅱ
二瓶	智香子 (にへい ちかこ)	桜蔭→東大文Ⅰ
原田	真琴 (はらだ まこ)	桜蔭→東大文Ⅰ
半田	ゆり (はんだ ゆり)	女子学院→東大文Ⅲ

Q : 今一番やりたいことは？

原田：映画を見たいです。映画は大好きなんですけど、受験勉強中はウォークマンに変換して入れて少し見ては、「よし頑張るぞ！」みたいな感じで、しっかり腰を据えてみることは後ろめたくてできなかったの…。「やっぱりここで見たら落ちるでしょ」みたいな。

石丸：私は、外国アーティストのライブに行きたいです。

二瓶：私の場合、もともと何かを我慢するということがなかったし、ストレスもなく勉強してましたから、今は買い溜めた本を読みたいというぐらいですね。受験勉強中もテレビは普通



に見ていました。1日のノルマを自習室でやった後は、家に帰ったら勉強もせずに普通の生活を送っていました。

半田：油絵をずっと描いていなかったので絵を描きたいと思います。昨日からもうキャンバスを張って…。

Q：いつごろ、どんな理由で東大を目指しました？

半田：私は美学を学びたくて大学に進学したかったのですが、そうすると大学もけっこう限られていて、芸大か東大かで悩んでいました。東大にしようかなと思ったのは、まわりに優秀な人がいる環境を求めてです。私は中学受験のときから成績がよくなくて、女子学院では自分より何段もレベルの高い人に囲まれながら学校生活を送ることが常に原動力になっていたので、やはり努力を重ねてきて、きっといろいろな才能が集っているだろう東京大学で勉強してみ



たいなという思いが次第に強くなっていったのです。



原田：最初に東大を意識したのは小学生の頃で、周りの人が「日本で一番すごい大学なんだよ」というのを聞いて興味を持ちました。でも本当に自分で目指したのは高2の終わりの頃です。桜蔭という

とみんな東大を目指す気風があるんですけど、そうした流れに乗るのがいやで、自分で「これだ」という理由がみつからなければ安易に東大を目指す必要はないと思っていました。でも、敬意を抱ける先輩が東大だったり、将来は自立して社会に出たいという思いが私にはあって、女性で社会に出て自分の道を進むためには高い学歴も必要かなと思って東大に決めました。

石丸：父方の家がもともと経済学系で、東大を出て経済学の道を進んでいた祖父とか叔父から、東大は本当にいい学校だと、私が小さい頃か

ら常々聞かされていて自然と刷り込まれていったようなところがあります。そんな環境だったので、自分でも新聞の株の欄を見ていると、数字が並んでるだけなのにワクワクしてきて(笑)、この道は自分にあっているんじゃないかと思います。また半田さんが言ったように東大には全国から優秀な人が集まってくるわけで、そんな中で自分も勉強したいという気持ちが高まっていった感じです。

二瓶：桜蔭に入った時点で「東大に行くのだろうな」と思っていました。で、高3になった頃、いざ東大のどこを受けるかということで自分の成績に自信がなかったので、とりあえず文Ⅲに入ればいいかなと思っていたんです。心理学や教育学にも興味があったのでそこで勉強して就職して、くらいに考えていたんです。ところが夏の模試を受けたとき、文Ⅲで出していたんですが文ⅠでもA判とれる成績で。思い返してみると桜蔭の授業で扱った裁判の判例にとっても興味を持ったこともあったんです。それで目指せるんなら文Ⅰにしよう

という気持ちになりました。

Q :これからどんな大学生活を送りたいですか？

二瓶：東大に行く人って公務員になりたいとか弁護士になりたいとか、わりと明確な目的意識を持っている人が多いと思います。私の場合は、文Iにしたのは高い山がそこにあるなら登ってみようという気持ちが大きかったからです。駒場にいる間にこれからのことはじっくり考えていこうと思っています。

石丸：私は公認会計士の資格は取ろうと思っています。手に職をつけなさいと親にも言われていますし、資格はあったほうが安心だろうなと。その後、起業することにも関心があります。自分の力でどこまでやれるか試してみたいという気持ちです。

原田：私も石丸さんと同じで手に職をつけたいし、



資格は一生ものですから資格を目指します。でも石丸さんとは違って私は数字が並んでいると蕁麻疹がでるタイプなんで(笑)、弁護士を目指して勉強します。できれば日本でだけでなくアメリカの資格もとりたいです。

半田：私の場合は両親から、「で、就職はどうするの？」と言われているんですが、とりあえず大学院までは美術の勉強をしたいと思っています。今ちょっとやりたいなと考えているのは修復の仕事です。フランスかイギリスにも留学して、日本では学べないことも勉強して海外で仕事もできたらそれが理想です。

Q：東大に絶対入るぞ、という意気込みでしたか？

二瓶：もともと私立に行く気がなかったのが東大だとは思っていましたが、でも、「絶対文Iに！」という気合はなかったと思います。「入れたらいいな」という程度の思いながらも他の大学には行く気はなかったという感じでしょうか。でも、直前期には「絶対行く」という気持ちになりました。

石丸：実は私、受験勉強の期間はずっと「なんとなく入れるんじゃないか」みたいに甘く思っていたんです。でも、試験の2週間前くらいになって「絶対浪人したくない！」という気持ちが大きくなって、そこから死ぬ気でやりました。

半田：私は、入れたらいいなどころか、「自分が受験できるなんてすごい！」というぐらいの気分でした(笑)。最後まで全然自信はなかったです。私立で満足できるというわけではないのですが、美術をやるには私立でも充分魅力的な大学もありましたし。だから緊張もしなくて、逆にそれが良かったのかなと思っています。

原田：私も二瓶さんと同じような感じで「チョー入りたい！」という感じではなかったけど、中学入試の時に私立の付属校を蹴って桜蔭に入っているの、国立に行きたいとは思ってましたね。親も1年くらいなら浪人してもいいよと言ってくれていたの、それならそれでもいいかという気持ちで。

Q :なぜグノーブルを選んだのでしょうか？

半田：学校にグノーブルに通っていた友達がいたんですけど、その人たちは単に勉強ができるだけではなくて、頭が切れる人たちばかりだったんですね。「こんな人たちが行ってる塾ならいい刺激を受けられるだろう」と。あと私は数学も取ってたんですけど、以前通ってた塾ではまったくついていけなくて、そんなこともあって英語でお世話になっているグノーブルを信じてみようと思ったんです。少人数で本当に力をつけていただけて良かったです。

石丸：中1からグノーブルを起ち上げた先生方に英語と数学を習ってたんです。中1ながらにいい授業だなんて思っていましたから、グノーブルが出来てすぐ迷わず先生たちについてきました。

二瓶：そもそも他の塾に行っていた同じ学校の人たちは総じて英語に不満をもらしてまして、それから、中山先生がいい先生だっていう評判も聞いてましたからグノーブルしかないと思って決めました。東大で有名な他の塾の場

合、単語をとにかく覚えなきゃいけないという主義らしくて、友達同士で話をしていると、だいたいの方は「力がついているかどうか分からない」という不安というか不満を漏らしてたんで、そこの英語はないなって思っていました。結果的にはグノーブルで英語と数学を学んで正解だったと思います。

原田：私の場合はいろんな塾を放浪していて、どこもいまいちピンとこなかったんですね。で、いろんなパンフレットを読んだりネットで検索したりしながら塾の噂をチェックしていたんです。そんな中で知ったのがグノーブル。最初から優秀な生徒がそんなに移動したんならきっといい先生たちなんだろうなって。ダメだったらまた変えればいいと思っていたんですが、入ってみたらすぐに「私が求めていたのはここ！」という直感が働きグノーブルで最後までお世話になることに決めました。

Q :グノーブルの良さとは？

石丸：英語の場合、なにしろ演習量が多くて、立

て続けに英語が頭に入ってくるところです。他でよくある、1時間の授業で英文の構文解析を1題やって、なんてのは語学の勉強じゃないと思います。あと、先生が本当に私たち一人一人を見ててくれるんです。授業中にはよく当たるんですけど、それも「当てて欲しくないなあ」てときになぜか当たるんですけど(笑)、それだけに頭は本当に活性化します、というかさせられます(笑)。

半田：先生が当てるので、「ああ、あの人はあんなに出来るんだ」と思えたり、そのときに自分が分かってなかったら、「もっとがんばらなきゃ」と思えたり、当てられていないときにも脳にはいい刺激がありました。それから先生にとっても質問しやすい環境だったし、先生方が生徒一人一人の、ここができて、ここができてなかった、ということをすごくよく分かってくださっているので安心して勉強することができました。

原田：授業中に毎回添削してくださるのが私には本当に良かったです。高3は毎週、英文要約

で授業が始まるんですけど、要約はちょっと気を抜くとすぐに点数が下がるんです。グノーブルが勧める英文の音読を励行していると本当に翌週は英文がスラスラ読めて点が上がるんですけど、少し怠けると逆で…。普通だと模試が唯一成績が見える機会だと思いますが、添削を通して自分の実力の細かい変動がよく分かるので毎週大きなモチベーションになっていました。

二瓶：他の塾がとりあえず単語を覚えなさいという方針が多い中で、グノーブルでは言葉の成り立ちから解説してくださったので、特別に単語に時間を割くこともなく語彙力がついた点が大きかったです。英語の勉強に割く時間が大幅に短縮できたと思います。とても効率的な勉強方法でした。

あと、先生の熱意がひしひしと伝わってきます。こちらも「期待に応えたい」という気持ち湧いてくるというか、教わったことをきちんと身につけたいという気持ちが生まれます。

原田：先生が名前を覚えてくれるんです。入塾してすぐに名前と呼ばれるんで、「え？」っていう驚きがありました。名前と呼ばれるってことは、自分が先生に認識されてるってことだから、「これは手を抜くとばれる」みたいな感じもありました。それに、私はそんなに質問にいく方じゃなかったんですけど、先生は私のどこが出来てて、どんなところが出来てないってことをすごく知ってて、それが本当に不思議だったんです。グノーブルの先生は、とってもよく生徒のことを見てくださっています。

石丸：私は別の予備校に世界史を習いに行っていましたけど、そこでは先生は私たちのことを覚えてくれないっていうか、覚えようともされてませんでした。質問に行っても、質問することが申し訳ないって雰囲気、やっぱり、グノーブルの先生との距離の近さは私にも大きかったです。

Q : グノーブルの授業がきつかったことは？

二瓶：高3になると1つの授業が4時間ぶっ通しということもあり体力的にきついこともありでしたね。でも入試の時は、入試の2日目の最後に英語があるわけで、体力の消耗は模試などとは比になりません。疲れがピークに達して集中力が切れそうになるところで英語を受けるという東大受験の現実を考えると、グノーブルの授業を受けてきたからこそ最後まで手を抜かないで踏ん張ることができたんだと思います。

石丸：私、最初の頃、グノーブルの授業で熱を出してしまったんです。授業の密度が濃くてがんばり過ぎちゃって。それを乗り越えてやっていくうちに体力がついたという実感は私も大いにあります。

原田：きつかったというか、最初は慣れなくて戸惑いました。以前は、英文を文法的にばらばらに分析して読むやり方で教わっていて、私はその読み方しかできなくなっていたんです。グノーブルで「英文を戻って読むネイティブ

の人は一人もいない！」って言われて頭がパニックになりました。でも、今ではそのやり方を指導していただいて本当に感謝しています。英文を頭から一読すれば意味がとれるっていう、当たり前前の読み方ができるようになりました。知らない言葉が出てきても、単語の成り立ちからとか、文脈からや同義語での言い換えから、など何通りもの推測の仕方を指導してくださったので、読むスピードは格段にアップして、内容に集中できるようになりました。

半田：私がグノーブルに入ったのは高2の冬で、実力があるとは思えなかったにもかかわらず、なぜかテストで点をとってしまい、春期講習から1番上のクラスに上がったんです。それからというもの毎週悔し涙を心の中で流してきました(笑)。単語も知らない、構文もとれないで、いつも必死だったんですけども、そのたびに悔しくて、授業でもらったプリントも口でそらんじられるくらい読みまくりました。中山先生が「これはみんなも知ってると思う

けど」とおっしゃって「そんなの知らない…」という連続で(笑)、必死に食らいついていく日々でした。でも、今では不思議なもので、次は、ラテン語やヘブライ語などいろんな語学に挑戦しようかなあって(笑)。

二瓶：クラスの中で「悔しい」って思えることは向上心につながっているように思います。受験の直前になるまでリアリティってなくて、普段からモチベーションをあげるためには「悔しさ」って必要だと思います。あまり受験に対する切迫感がない時期から、グローバルの授業で悔しさをばねにして前進できたってことは大きかったと思います。

Q：こうして欲しかったというところは？

二瓶：特にありませんね。

原田：強いて言うなら時計見ると「もう10時!？」なんて驚くこともあったことくらいでしょうか。でも授業に勢いがあるので、それはそれでOKかな。

半田：これはグローバルへの注文ではなくて、む

しろ後輩へのアドバイスになると思うんですけど、私の場合、「英語は好きだから高3から塾に通えばいいかな」とのんびりしてたんです。絶対もっと早くからグローバルに入るべきでした。

Q : グローバル数学・国語の魅力は？

半田：私は数学が壊滅的で、高2で受けた模試は偏差値30いくつかでした。それを救ってくださったのが越川先生です。先生はいつも手書きのプリントを作ってくださっていたので、それを何回も何回も、書いてある一字一句を覚えるくらいにやりまくりました。授業でも集中しているんですが、私の場合授業だけでは吸収できないことも多く、家とか学校とかでの復習がしやすいプリントだったので、それを何度も見直すのを習慣にしてみました。越川先生にはとっても感謝しています。

石丸：私は数学を長澤先生に習っていたんですが、この先生につけば本番で四完も目指せると思っています。他の受験生が知らないような問題に

対するアプローチというか“技”もたくさん教えてくださいました。「解法に対するたくさん引き出しを持っているんだ」ということで試験会場でも落ち着いて、普段以上に力が出せたと思います。

あと国語の行村先生はとにかくパワフルで、体全体を使った授業でした。古文単語もその成り立ちから、先生が自分で面白い劇とかやりながら教えてくれて、目と耳で覚えられました。本番でも「先生がこの単語の意味はこういうふうに説明してくれたな」と思い浮かびました。

私は高2で現代文もとっていたのですが、東大にぴったりの授業で、行村先生に、「東大の国語はセンスじゃなくて情報処理だ」と言われて、それですごく明快に考えられるようになりました。受験学年では国語の勉強は必要ないくらいまで力をつけてくださいました。

二瓶：やはりグノーブルの数学の良さは少人数だということです。ほんとに一人ひとりの実力を詳細に把握してくれていたのも、ほとんど

個人指導に近いくらいの距離感でした。数学は自分が分からないところを明確にして、それを克服していくという作業が特に大事なので、そうした意味では先生の熱意が直に伝わる少人数制は大きなメリットでした。

私も古文を行村先生に習っていましたが、古文単語は行村先生独特の教え方で他塾とは一線を画すると思います。古文って、先生が黒板に書いて私たちが写して、というのが普通の授業だろうなって思うんですけど、行村先生も英語の先生と同じで、がんがん私たちが当てるし、生徒も参加していっしょに授業を作っているという感覚が持てるのはグノーブルに特徴的なことかなって思います。

Q : 勉強以外にグノーブルで学んだことは？

半田：グノーブルで扱う英文は、そんなに受験受験してないんです。私自身はグノーブルで扱う英文を読むのが大好きだったんで、“授業プリント・コレクション”みたいな感じで、ノートにプリントを貼り貼りして(笑)、学校の

授業がつまんないときは、それをずっと読んでました。私は将来は海外で勉強もしたいし、仕事もしたいと思っているので、自分の人生を生きていくために英語を勉強してるわけで、この教材は絶対糧になるなっていう風に感じながら、受験勉強もできたのは大きかったと思います。

英文の内容自体がすごく惹かれるものばかりで、グノーブルで読んだ教材から興味が湧いて、その分野の別の本を買ってきて読んだりもしていました。自分の進路選択についても深く考えさせられる英文にグノーブルで触れられて、そういったところからも美学を学ぶ決意の外堀が固まった感じです。

原田：私は、「受験勉強です」みたいな勉強をするのがすごくいやで、たとえば、東大受かってその後使えない英語だったら、英語を学んできた意味がないじゃないですか。グノーブルの授業を通して英語の原書を読むことに対して抵抗感がなくなったというか、しっかり下地を作っていただけことに、私はとても感謝

しています。

それから、半田さんが言っていたみたいにグローバルの英文プリントは面白いんですけど、それだけじゃなくて、中山先生がすごく博識で、英文の内容を深く理解できるようにわかりやすく解説してくださるんです。そうすると、今度は、たとえば国語の文章を読んだときに、「あっ！これ、あのことか」って、自分の中に回路がすでに組み立てられているので、理解がすんなりできたりして、英語の授業を通して、実は幅広く通用する力もつけてもらっていたんだ、と思ってました。

石丸：私は、中山先生がお話しになった「離見の見」というか「メタコグニション」の話が一んとききました。試験を受けてるときに集中し過ぎてまわりが見えず、それで自滅するってことが私の場合本当によくあったんです。自分はここで試験に向かっているんだけど、もう一人の自分が離れてるところで、冷静に自分を見ているつもりになるとうまく行く、という話なんです。それを実践したら本当に冷

静に試験を受けられるようになりました。
私は猪突猛進というところがあって、一つのことに集中すると周りが見えなくなるタイプだったんです。もう一人の自分が常にいて、自分のことを冷静に見ている。そんなことを訓練していったら勉強も含めて生活全般にゆとりを持つことができるようになりました。人間的に少し成長したんじゃないかなと思います。

二瓶：グノーブルというのはお仕着せの授業をするのではなく、また手取り足取り勉強を教えてくれるというのではなく、ある程度生徒に一任されている部分もあります。テスト勉強にしても自分の実力をしっかり見極めて、うまくできてないところは自分で認識して対策を立てるってことですけれど、つまり、主体的に取り組む姿勢を学べたと思います。

Q：東大を目指す後輩たちにアドバイスを。

二瓶：やはり主体的に勉強することだと思います。
自分で自分の力を認識して、自分の意志で予

復習を繰り返すってことじゃないでしょうか。そういった意味ではグノーブルは自分の意識がそこまで達していなくとも主体的に勉強できる仕組みになっていると思います。こう言っている私も最初から主体性を持っていたわけではありませんが、グノーブルで学ぼううちに自然と、自分から実力を高めていこうという気持ちが湧いてきました。ですから、グノーブルで学べば大丈夫なんだけれども、それでも、受け身じゃなくて、自分からという気持ちを心がけていくのがいいと思います。

石丸：勉強以外のことに時間をいっぱい割いたほうがいいと思います。勉強ばかりだと視野が狭くなってしまうので、家の手伝いや読書などでもいいのですが、そうした時間を持つことが大事だと思います。大学生になったら忙しいと思いますので中学・高校生のうちは勉強も大事ですがそれ以外のことでも自分自身の土壌をつくるのが大事だと思います。そうした意味で私は少し後悔している部分もあります。

原田：高3からの1年って、椅子に座っている時間が必然的に多くなってくると思います。ですから、できるだけ体を動かすようにしたほうがいいんじゃないかなと思います。やっぱり受験って最後の最後は体力勝負というところがあるので。そんなに鍛え上げる必要はありませんが、気分を転換するという意味でも、また精神力だけではどうにもならない最後の踏ん張りが効く程度の体力維持は必要じゃないかと思います。

半田：私が思うにはメリハリが大事だと思います。私は学校にいるときは相当遊んでまして、うちの学校は体育の授業を生徒が教えるんです。私はずっとテニスをやっていたので、テニスの指導者ということで毎朝7時30分から朝練をして、昼もバレーやバスケットボールをやると、とにかくスポーツばかりして学校ではぜんぜん勉強していないという生活だったんです。ですけど、学校が終われば集中して勉強をする。高2までは部活ばかりやっていたので自分で自分を管理するというこ

ともおそらくそこで学んだと思います。勉強するところではしっかりやらなきゃいけないけれど、それ以外では友達と遊んでも趣味に打ち込んでもいいんじゃないでしょうか。要はスイッチの切り替えができるような自己管理が一番重要だと思います。そのお陰で私は最後まで体調も崩さずに健康に過ごせました。

東大合格発表の翌日（2010年3月11日）

グローバル新宿本館にて